

第6章 火災時の避難行動・心理・人間生理

6・1 火災と人間心理

6・1・1 火災時の人間心理

(1) 火災時の人間の心理と行動のモデル

人間の心理過程と行動はその個人を取り巻く環境への適応過程としてとらえることができる。環境への適応を可能とするためには、個人を取り巻く環境変化を認識する認識系と、それに応じて行動を変容させる効果器系の間の協応関係が必要になる。自分がどのような状況にいるかを認識し、その中で最も環境へ適応的な行動を選択し、実行する。その結果が新しい状況を生み、それに応じて行動も修正されるという。こうしたフィードバックループの存在によって、人間は環境に対する適応的な行動が可能になるといえる。

火災は環境の急激なしかも人間の生命や財産にとって危険な環境の変化である。したがって、火災に対する人間の対応行動は、火災の発生によって生じた新しい現実に対する適応行動としてとらえることができる。本節では、図6・1に示す火災発生時の人間の対応のモデルに基づいて、火災時の危険性を検討する。

図6・1の二重線で囲んだ部分は、個人の認識過程を示している。火災の発生によって、炎、煙、臭い、熱、非常ベルの音、周囲の人々の反応、消防車や救急車の喧騒などといった環境変化が発生する。こうした変化を情報として、個人はそれがどのような意味を持つかについての状況認識を成立させる。また、環境変化を情報として受けるばかりでなく、そうした環境変化や直接的に火災に関する情報を人から知られることで状況認識を成立させる場合もある。情報そのものが不足していたり、曖昧であったり、あるいは個人

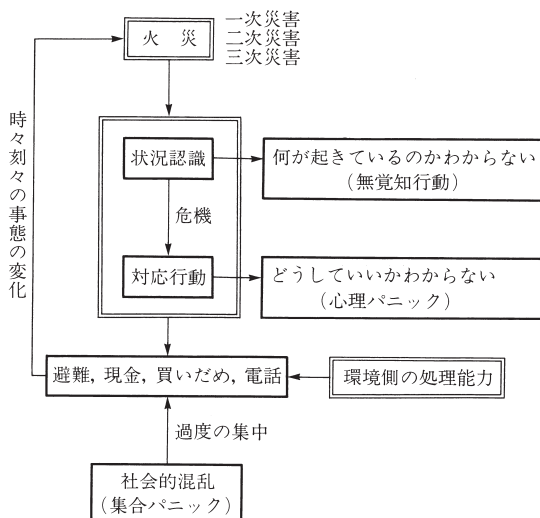


図 6・1 火災発生時の人間の対応のモデル

の側に情報処理能力が不足しているときには、環境変化が正しく認識されない危険性もある。個人が火災の発生を認識できた状態を「火災覚知」という。火災防災の観点からは、火災発生から覚知までの時間をいかに短縮できるかが重要な課題となる。睡眠、飲酒、病気などによる意識水準の低下あるいは注意の低下は覚知を遅らせる要因として影響する。さら